

死後の世界 第一部 死とは何か 第3章 非物質的部分【靈魂】の不滅 ①

この学び全体のアウトラインと本日の内容

第一部 死とは何か

第1章 人の構造

第2章 死についての聖書的理解

第3章 非物質的部分【靈魂】の不滅

第二部 人は死んだら、どこへ行くのか

第1章 肉体の死後、人の靈魂はどこへ行くのか

第2章 復活までの中間的状态

第三部 死者の復活

第1章 教会の携挙【新約時代の信者の復活】

第2章 大患難期の後の75日間【旧約時代の信者と大患難期の殉教者たちの復活】

第3章 メシアの王国【信者は肉体の死を経ずに全員が変換】

第4章 王国の後【不信者の(第二の)復活、不信者は第二の死へ】

第四部 新しい天と新しい地での永遠の生活

第2章「死についての聖書的理解」では、肉体の死とは、人の非物質的部分である「靈魂」が肉体から分離することであると学びました。では、肉体を離れた靈魂はどうなるのでしょうか？これが、第3章「非物質的部分【靈魂】の不滅」のテーマです。

「非物質的部分【靈魂】の不滅」のアウトライン

1. 靈魂の不滅とは
2. 聖書が靈魂の不滅を教えている箇所(17)
3. 靈魂不滅を確信することの意義

2回に分けて、本日は、2. の17項目のうち、10番目までを学びます。

本日の内容 非物質的部分【靈魂】の不滅 ①

1. 靈魂の不滅とは
 - (1) 肉体の死の後も、靈魂は無くならない(不滅)。靈魂は、永遠にそして継続的に、意識をもって存在し続ける。
 - (2) 聖書が「不滅」あるいは「不死」という表現をする箇所としては、Iコリ15:53~54、「不死を着る」がある。
 - ① これは、教会の携挙のときに地上で生きていた信者の体が、一瞬にして、栄光の体に変換されるときのことを指している。

- ② この栄光の体は、主イエスの復活の体と同じように、もはや死ぬことのできない体（ロマ 6：9）である。その意味で、「不死を着る」と表現されている。
- ③ よって、この箇所は、身体的な不死を教える箇所であって、霊魂の不滅についてではない。
- (3) 本日の学びでは、身体的な不死ではなく、霊魂の不滅について扱う。
2. 聖書が霊魂の不滅を教えている箇所
- (1) 自分の民に加えられた（創 25：8、17、35：29、49：29、33）
- (2) 自分の先祖のもとに行く（創 15：15、47：30）
- (3) エノクは死を経ることなく、天に引き上げられた（創 5：24）。
- ① 「変換」＝死を経ることなく、栄光の体に変えられること。エノクは変換の初めてのケースである。
- 2番目は、エリヤ（Ⅱ列 2：11）
 - 3番目は、教会の携挙のときに地上で生きている信者（Ⅰテサ 4：17、Ⅰコリ 15：51～52）
 - 4番目は、千年王国の信者（イザヤ 65：19～25、黙 20：5～6）
 - 信者の復活は「第一の復活」と呼ばれ、千年王国の始まる前に完了する（黙 20：5～6）。
 - 千年王国の信者は、第一の復活には関係しない。
 - よって、千年王国の信者は全員、死を経ないで、変換される。
- ② エノクは栄光の体に変えられて、天で存在し続けている。そのことは、ヘブル 11：5で確認されている。「信仰によって、エノクは死を見ることのないように移されました。」
- (4) ヨブの自問自答、彼は霊魂の不滅と体の復活を確信していた（ヨブ 14：14、19：25～26、27）
- ① 14：14 「人が死ぬと、生き返るでしょうか。」
- 下線部の原語 カウヤウは、「生きる、持続する、再び活性化する」
 - 「生き返る」と訳すと、「体が復活するのか」という意味だけになってしまう。
 - 14節でヨブが自問しているのは、「人が死ぬと、生き続けるのか?」、すなわち、「人は死んでも、霊魂は生き続け、やがて体も復活するのか」という問いである。
- ② 19：25～26 「私は知っている。私を贖う方は生きておられ、後の日にちり【土、地】の上に立たれる【立ち上がる】ことを。私の皮が、このようにはぎとられて後、私は私の肉から神を見る。」
- 下線部の原文を語順の通りに直訳すると、「～の後に・私の皮が・それらが破壊されて・この・私の体・私は見る・神を」
 - ASV(英語訳) 「私の皮が、そしてこの【体までも】、破壊された後は、私は、私の肉体なしで (without my flesh)、神を見るであろう」
 - この箇所は、肉体の死のあとでも、霊魂は意識をもって存在を続け、神

を見ることができる、という確信の表明である。

- ③ 19:27 「この方を自分自身で見る。私の目がこれを見る。ほかの者の目ではない」 自分の目で神を見る、これは体の復活についての確信表明。
- (5) 聖書は、体の復活があることを教えている。肉体が一度死んで、復活するまでの間に、霊魂が滅んでしまうとすれば、復活には何の意味もない。私たちの霊魂がなくならずに、意識をもって存在し続けるからこそ、からだの復活に意味がある。復活を明確に教える箇所は、
- ① 旧約聖書・・・イザヤ 26:19、ダニ 12:2~3、ホセア 13:14
- ② 新約聖書・・・ヨハネ 5:28~29、黙 20:4~6 (後記参照)、11~15
- (6) 肉体を離れた霊魂が意識を持っている
- ① 詩 17:15 「私は、正しい訴えで、御顔を仰ぎ見、目ざめるとき、あなたの御姿に満ち足りるでしょう」
- 下線部は ASV (英語訳) では、「義の中にあって」
 - 1 コリ 1:30 「キリストは、私たちにとって、・・・義となられた」→ 新約の聖徒にとっては、「キリストにあって」となる。
- ② 詩 73:23~25 アサフの賛歌「後には栄光のうちに受け入れてくださいます。天では、あなたのほかに、だれを持つことができましょう」
- ③ 伝 12:7 「霊はこれを下さった神に帰る」
- ④ ルカ 23:43 「あなたはきょう、わたしとともにパラダイスにいます」
- ⑤ ヨハネ 14:3 「わたしが行って、あなたがたに場所を備えたら、また来て、あなたがたをわたしのもとに迎えます。わたしのいる所に、あなたがたもおらせるためです」
- ⑥ II コリ 5:1~8 「私たちの住まいである地上の幕屋がこわれても、神の下さる建物があることを、私たちは知っています。それは、人の手によらない、天にある永遠の家です。私たちはこの幕屋にあつてうめき、この天から与えられる住まいを着たいと望んでいます。それは着たなら、私たちは裸の状態になることはないからです。・・・むしろ肉体を離れて、主のみもとにいるほうがよいと思っています」
- ⑦ ペリ 1:21~24 「私の願いは、世を去ってキリストとともにいることです」
- (7) ダビデは、死んだ子どもがいるところへ自分も行くことになるかと語った (II サム 12:23)。旧約の聖徒たちにとって、霊魂の不滅は、神の祝福の中にある希望であった。
- (8) よみ^へシェオールにいる人たちには意識がある
- ① イザヤ 14:9~11
- 9 節 バビロンの王が、シェオールの中にある下界に来る。
 - 下界に先に入っていた者たちが皆、バビロンの王が来るのを見て驚いて立ち上がる。
 - 彼らは、バビロンの王に、告げる。「あなたもまた、私たちのように弱くされ、私たちに似た者になってしまった」

② ルカ 16 : 19～31

● 金持ちと乞食ラザロの実話

- この箇所は、「たとえ話」ではなく、実話である。
- イエスがたとえ話を語るときには、大抵は、冒頭に「このたとえ話から学びなさい」と前置きした。ここには、そのフレーズはない。
- たとえ話では、ラザロとかアブラハムといった人物の実名は使わない。この箇所は、実話である。
- 金持ちは死んだ。ラザロも死んだ。二人とも、死後、意識がある。
 - 二人とも死んで、彼らの霊魂はよみに下っているが、よみの中での場所は別々である。
 - 金持ちは「苦しみ場所」、ラザロは「慰め場所」。慰め場所は、「アブラハムのふところ」と呼ばれている。
 - 位置関係は、苦しみ場所が下。23節に「目を上げると」
 - 26節 二つの場所の間には大きな淵があり、行き来はできない。
- さらに何世紀も前に死んだアブラハムも登場する。
- アブラハムと金持ちは、会話をかわしている。彼らは、明確に意識をもっている。

(9) 人は心の中に永遠を持つ (伝道 3 : 11)・・・心は、人の非物質的部分である霊魂の要素《 霊、魂、心、思考、意志、良心 》のひとつである。神が人の心の中に永遠を与えた。これは、人の霊魂は永遠であり、不滅であることを意味する。

(10) 預言者にして最後の士師であったサムエルが、サウル王の前に現れた出来事 (Iサム 28 : 8～19)

- ① この経緯については、後記「補足説明」参照
- ② 死者の霊魂が現れたのは、歴史上、唯一これだけである。
- ③ このとき、サムエルの霊魂をシェオールから上らせたのは、神である。サムエルは復活したのではない。サムエルの非物質的部分である霊魂がシェオールから上らされた。
- ④ サムエルの霊魂は、サウルと会話することができた。そして、サウルの死期が来たこと、明日のペリシテ人との戦いでサウルが死ぬことを知らせた。
- ⑤ サムエルが、肉体の死の後も、その意識は完全にもっている、ということがわかる。

■補足説明

1. 黙 20 : 4～5 についての解説

(1) 4節には、信者たちの3つのグループがある

- ① 新約時代の教会の信者たち
- ② 大患難期前半での殉教者たち
- ③ 大患難期後半での殉教者たち

(2) 4節を直訳すると次のとおり

- ① 「私は座【複数形】を見た、彼らはその上に座った、そして裁きは彼らに与えられた」
- 下線部の「彼ら」は、文脈上、19:14「天にある軍勢【複数形】」を指す。「まっ白な、きよい麻布を着て」とあるので、天使ではなく、信者である。「白い馬」は、地上に再臨するメシアも乗っておられる(19:11)。詩篇18:10(再臨預言)により、ケルブ(天使の最上位)である。
 - この麻布については、19:8「花嫁は、光り輝く、きよい麻布を着ることを許された」とあるので、天の軍勢=花嫁。
 - 花嫁は、教会の信者たちである(マタ9:15、ヨハ3:29、エペ5:23~32)
 - 教会の信者たちが、きよい麻布を着ることを許されるのは、「キリストの裁きの座」を経てのことである(IIコリ5:10、Iコリ3:13~15)
 - きよい麻布を着ることを許されてのち、「小羊の婚姻」へ。婚姻の式は、天において行われる。
 - その後、メシアとともに、地上へ。千年王国が始まる時に、「小羊の婚宴」(黙19:9)、すなわち披露宴である。これは、地上で行われる。披露宴の客は、旧約の信者たちと大患難期の信者たちである(ヨハ3:29、マタ22:2~10、マタ8:11)。
 - 以上により、黙20:4の「彼ら」とは教会の信者たち(ユダヤ人と異邦人)である。そして、「裁きが彼らに与えられた」とは、キリストの裁きの座を経たことを指す。また、19:4で「天の軍勢」が複数形になっているのは、教会の信者が、ユダヤ人のグループと異邦人のグループから成るためである(エペ2:11~22、3:6)。
- ② そして(私は見た)、たましいたちを、イエスのあかしと神のことばとのゆえに首をはねられた人たちの」
- これは、大患難期前半、世界統一宗教組織(総本山はバビロンに置かれる)によって迫害され、殉教した信者たちを指す(黙17:6)
- ③ そして(私は見た、たましいたちを)、獣やその像を拝まず、その額や手に獣の刻印を押されなかった人たちの」
- これは、大患難期後半、反キリスト(獣)に屈することなく、666の刻印を受けずに、殉教した信者たちを指す(黙13:8~18)
- ④ 彼らは生き返った(生きた)、そして王となった(支配した)、キリストとともに千年の間
- 下線部の「彼ら」は、文脈上、①から③までの信者たちを指す。
 - 「生き返った」と訳されているが、原語は「生きた」。①のグループはずでに復活している。
 - 「王となった」と訳されているが、ロマ5:17では同じギ原語を「支配する」と訳している。

(3) しかし、その他の死者は、千年が終わるまでは、生き返らなかった。これが、第一の復活である。

① 「その他の死者」とは、旧約時代から新約時代を通して、すべての不信者である。彼らの復活は、黙 20 : 11~15

② 第一の復活は、次のような順番である。

- 初穂は、イエス (I コリ 15 : 23)。すでに起きた。
- 二番目は、教会の信者たち (I コリ 15 : 23、I テサ 4 : 13~17)。大患難期 (7年間) の前に起きる。
- 三番目は、二人の証人 (黙 11 : 11~12)。大患難期前半期の終わりで起きる。
- 四番目は、旧約時代の信者たち (ダニ 12 : 2)。大患難期が終わり、千年王国が始まるまでの 75 日間の中で、起きる。
- 最後は、大患難期の殉教者たち (黙 20 : 4)。四番目と同じ時期に起きる。

2. I サム 28 章「サムエルが、サウル王の前に現れた出来事」についての解説

(1) 3 節 霊媒や口寄せ (詳しくは、福岡集会 2017 年 5 月 20 日「天使論：悪霊②」)

① 霊媒 : オウブ「親しい霊」という名の悪霊

② 口寄せ : イド デー オニィ 「ヤウダー知る」に由来。男の魔法使い。千里眼、透視能力者、超能力者を含む。

③ 霊媒や口寄せは、悪霊と交信をする者たちである。

(2) 霊媒によって死者の霊を呼び出してもらおうといっても、実のところ、霊媒にはそのような力はない。

① 霊媒は悪霊と交信し、オウブ「親しい霊」という名の悪霊を呼び出す。

② この悪霊は、死者の生前の声や話し方をマスターしている。また、依頼者と死者の間の秘密などを、あらかじめ悪霊の組織的情報網により入手している。

③ そして、霊媒の呪文を聞くと、死者の霊になりすまして、霊媒に入り、霊媒の声帯を用いて、死者そっくりの声と話し方により依頼者に親しげに語りかけ、依頼者を欺く。

(3) 6 節 サウルは主に伺ったが、主が夢によっても、ウリムによっても、預言者によっても答えてくださらなかった。

① サウルは信仰をもって主のみこころを求めたのではない。だから、主からは何の答えもないとなると、霊媒を頼った。

② I 歴 10 : 13~14 には、「不信の罪」とある。

(4) 12~13 節 霊媒の女は、いつものようにオウブ「親しい霊」を呼び出そうとしたら、いつものとは全く違う情景が見えて驚愕する。こうごうしい方が地から上ってくる。同時に、自分の前にいる依頼者は、変装しているが、サウル王であると知らされる。

(5) 14~25 節 サムエルの霊魂が、地から上って来て、サウルの前に現れる。そして、明日の戦いでサウルは敗れ、息子たちとともに死ぬであろうと告げる。